

小津久足とガーデニング

菱岡, 憲司
山口県立大学

<https://doi.org/10.15017/7363936>

出版情報 : 雅俗. 22, pp. 121-128, 2023-07-15. 雅俗の会
バージョン :
権利関係 :



小津久足とガーデニング

菱岡 憲司

やってみたいことはたくさんある。しかし時間は有限、当たり前だが、やれることは限られている。いちばんやりたいことは読書であるから、とりあえずそれを中心に据えて人生を設計してきた。紆余曲折はあったものの、本を読むことができる人生を歩んで来られたと思う。すくなくとも、本なんか読んでないで○○しろ、と叱責されるような立場には身を置いていないのは幸いといえる。

しかし、読書が柱であるのは動かないとしても、この極めてインドアな（別にアウトドアで読んでもよいが）行為だけでは、どうしても頭でっかちになり、経験が不足してしまう。なにか人生を豊かにする別の趣味、それでもできれば身体を使うものをやってみたい、という思いが熾火のようにくすぶっていた。しかし、あれもよさそうだ、これもよさそうだ、と考えても、あるいは深入りして読書時間を脅かしそう、とやる前から腰が引けてしまってもいた。

そんなあるとき、あれは大学院の演習だったか、学部生の演習を聴講していたときだったか、上野洋三先生が、後水尾天皇の「勉強」について言及した。

―昔の天皇というのは偉いもので、儒学なら儒学、詩なら詩、とそれぞれ三年間勉強し、それを対象を変えずっと学び続けたんや。それなのにテニスなんかやって、いまの（以下自粛）

それを聞いて、なるほど、習い事といえば、結果的に途中でやめることがあっても、基本的には習い続けることを前提にやるものだと思っていたけれど、三年でやめることを前提に、色々なものを学ぶという方法があるのか、と目から鱗が落ちた思いがした。このことは、ご著書のなかでも触れているので、そちらを参照すると、次のとおり。

天皇（*後水尾）の即位は、父帝後陽成天皇を中心とする宮廷経営の虚をつくり形で、徳川將軍家の思わく通りに進行したようであるが、受身に終始した宮廷側は、元和元年（一六一五）に「禁中并公家諸法度」を押し付けられた。そして、その第一条には、天子たるもの、よく学問をすべきである、和歌も習練に励むべきである、と定めてある。後水尾天皇は、これに對してよく勉強した。稽古日を定めて、数々の学問・技芸を廷臣とともに学習した。その「禁中御学問講」には、有識・和歌・儒学・楽部曲・連歌・詩文学・歌学・聯句・詩

などの科目があったという。廷臣は、このうち最低二つか三つに出席するように義務づけられたが、天皇自身は全科目に励んだ。もちろん能力には限界がある。言い伝えによれば、後水尾天皇は、各科目の一つずつについて特に三年を限って集中的に学習したという。ただし、その間も和歌ばかりは一貫して怠りなく学習を重ねたという。

（上野洋三『元禄和歌史の基礎構築』Ⅰ・第1章、岩波書店）

これだ。後水尾天皇になぞらえるのはさすがに気が引けるけれど、和歌ならぬ読書を柱としつつ、三年交替でやりたいことをひとつずつやっていけばいい。そして、もし性に合っていれば、三年が過ぎてもつづければいい。そう思い定めて、三年でやめることを前提に、気になっていたことに手を出すことにした。

まず最初の三年に手つけたのは、中国語会話。じつは学部のある、ほとんどの同級生が第二外国語で中国語を選択するなか、北杜夫経由のトーマス・マンへの憧れがあり、ドイツ語を選択した。それはそれで豊かな体験だったけれども、その後、馬琴研究をすることになったため、中国語をやっておけばよかったな、と後悔することもしばしば（正確には、第一外国語を英語などにせずに、第一をドイツ語、第二を中国語にすればよかった、と）。そこで、中国語ネイティブが講師をつとめている、近所のカルチャースクールに参加することにした。これはたのしかった。英語にせよドイツ語にせよ、我が語学学習のボトルネックは会話であったけれど、はじめから会話することを前提に、ちゃんと通じる発音を身につけ、中国語でコミュニケーションをとることができたの

は、なによりの財産になった。

その後、専任の職を得たこともあり忙しくしていたけれど、やはりなにかをやりたい。そこではじめたのが、自転車である。もともと大学院時代にバイクに乗っており（愛車はホンダのGB250クラブマン）、四輪よりも二輪への親しみがあったため、体力維持も兼ねて、自転車での通勤を思い立った。当時、自宅から職場へは、山越えのアップダウンのある片道十六キロ、まずまずの道程である。夏は暑さに、冬は寒さに苦しめられながらも、ギアが適切に決まり、田舎道を四季を感じながら疾走する心地よさは格別だった。

次の三年は、ドラム。若いころから音楽は好きで聴いてきたけれど、みずから楽器を演奏することはなかった。そこで一念発起。しかしこういうものは我流ではおかしな癖がついてしまうだろうから、基礎が肝心と、プロドラマーのもとにレッスンに通うことに。自分で演奏すると、音楽の聴き方が劇的に変わる。それまでまったく聴こえていなかったバスドラやハイハットが聴こえはじめる。またゴーストノートがいかにグルーヴをつくりだすか、表向きは8ビートで叩いて16ビートのノリを出すには、などプロならではの演技と「芸談」をマンツーマンで享受できたのも至福の体験で、日々、家で電子ドラムを叩いて練習することも、じつによいストレス解消だった。

つづく三年間はフルマラソン。軽いジョギングぐらいはたまにやっていたのだけれど、フルマラソンを走るとなると話は別。四二・一九五キロを走る体力を身につけるべく、日々練習に励んだ。

はじめてのフルマラソンは、さが桜マラソン二〇一七。フラットなコースが初心者にもうれしい。本当に走れるのだろうか、という不安を抱きつつ、一度も歩かずに完走したときの感動は、人生観が変わったといっても過言ではない。一度完走すると欲が出て、今度はサブフォー（四時間以内完走）をしなくなる。翌年挑んださが桜マラソン二〇一八では四時間四分、すこし及ばず。そして三年目のさが桜マラソン二〇一九で、ついに三時間五十一分のサブフォーを達成する。じつは、その前に走った下関海峡マラソン二〇一八ですでに四時間を切っていたのだけれど、思い入れのある大会で自己記録を更新して、有終の美を飾ることができた。

そして次に取り組んだのは、合気道。昔から武道に興味があったものの、じつさいは縁遠い人生を歩んできた。そこで、数ある武道のなかで、相手を倒すことに重きを置かない（印象のある）合気道を選んで門を叩いた。達人の技を我が身で受けるのは、まったくもって得がたい体験であった。受け身をしっかりと覚え、技も徐々に身についてきて、身体の使い方もわかってくると、いよいよおもしろくなる。そんな矢先、新型コロナウィルスが流行した。なにしろ掴む（掴まれる）ことから始まる武道であるから、思うに任せない。心ならずも、三年間をまっとうすることができなくなった。

さて、端から見れば節操なくやることを変えているように思えたとしても、こちらははじめから三年のつもりなので、中途半端のやましさは微塵も感じない。そしてやったからこそ気がつくのは、この三年という期間設定の絶妙さである。

浅学のよろこび——大西巨人『神聖喜劇』の主人公・藤堂太郎は、耳学問や生嚼りで田能村竹田に親しんでいるのだが、そうした態度で竹田の詩文章に接することに、なによりのよろこびを覚えていた。

私の耳学問ないし生嚼り類すなわち「浅学」の度合いは、他の（化政度）学者文人芸術家に関して、竹田に関する場合よりも、ひどくはあっても、軽くはなかった。『田能村竹田全集』所収諸詩文中には、（化政度）学者文人芸術家の名前あるいは事績あるいは逸話などが、しきりに出て来る。それらの一つ一つに出会うたびに、私は、一種のよろこび（一種の愉快な昂奮）を感じた。もしも私が全然無知無学な人間であったならば、それとももしも私が現状程度に浅学の男でなかったならば（もしも私が深い学識の持ち主であったならば）、いずれにせよその私は、そういう「一種のよろこび（一種の愉快な昂奮）」を感じることはできなかったであろう。

それならば、そういう「一種のよろこび（一種の愉快な昂奮）」は、手頃な「浅学」の賜物ということになろうか。私は、そういう「一種の愉快な昂奮」をひそかにみずから「浅学（者）」のよろこび」と名づけていた。

（大西巨人『神聖喜劇 第四巻』光文社文庫）

無知無学と深い学識とのあいだ、まさに浅学だからこそ味わえるよろこびが、この世には存在する。三年というのは、ちょうど初級を終えて中級に入ろうとするころ。私も一応、専門家の端くれなので、その中級から上級への長く険しい（もちろん一方では

充実した）過程も承知している。しかし、すべての専門家になることはできない。であるからこそ、その世界の魅力を知るにはいささか足りない一、二年でも、いよいよその世界の深奥を目指す四年以上の期間でもなく、中級に入ったか否かでやめる、この三年という期間設定が、浅学のよろこびを得るには最適であることを、身をもって知った次第。さすが後水尾天皇である。

さて、コロナによって合気道に対する浅学のよろこびは道半ばとなってしまうけれども、家に籠っていてもできる、新たななにかをはじめたくなる。そうして白羽の矢を立てたのが、ペランダ・ガーデニングである。なんとも唐突のような気がするが（そんなことをいえば、マラソンもドラムも、すべて唐突である）、ここにいたってようやく、小津久足が関係する。

小学生のころ、誰でも育てられるはずの朝顔ですら枯らした私
が、なぜガーデニングに心を寄せたのか。それは、肥料として魚粉を使ってみたからである。

小津久足は干鰯^{ほしか}問屋・湯浅屋与右衛門の六代目主人。干鰯とは文字どおりイワシを干したものであるが、これは肥料として田畑に用いられる。近ごろ、この湯浅屋の営みと干鰯の流通を調べる
ことがあり（調べた結果は拙著『大才子 小津久足——伊勢商人の蔵書・国学・紀行文——』（中公選書）第一章で詳述）、文章にまとめる過程で、この干鰯という肥料が植物の生育にどれほど有効なのかを、じっさいに体験してみたくなってきた。とはいえ、江戸時代の製造方法のままの干鰯はいまでは手に入らない。しかしそれに代わる魚粉は、いまでも有機栽培の肥料として重用されて

いるという。

そこで、魚粉を使うため、といういささか倒錯した動機で、マンション住まいにつきプランターによって、ペランダ・ガーデニングを試みることにした。なんでも寄せ植え（コンパニオンプランツ）にすると栄養を相補い、虫を寄せつけない効果もあるというので、プチトマトとバジルという、イタリアンにお誘い向きの組み合わせで、はじめてのガーデニングに手を染めた。

これが、じつにたのしい。馬齢を重ねると、目に見えて成長が実感できることなどそうそうないので、毎朝、昨日よりもすこし、ときには驚くほどおおきくなっているのを見て、心が弾む。こんなよろこびがあったのか。初心者にありがちな水のやり過ぎなどを経験しつつも、みごと実をつけ、満を持して真っ赤なプチマトを口に運んだときは感無量であった。

こうなると鉢は増殖する。シソ・ナス・レタス・ピーマン・ゴーヤ・ニラ・ネギ・ハクサイ・ブロッコリー・スナップエンドウ・ミズナ・コマツナ・シュンギク・チンゲンサイ・ラディッシュと王道の野菜を四季を通じてたのしむ一方、肝心の魚粉は、夏場に羽虫がわいて断念。結局、魚粉ではない別の有機肥料を用いることになり、もはや当初の動機はどこへやらである。

野菜ばかりではさびしいので、二種類のブルーベリーの鉢もそなえ、年を越す植物は、一年草にも増して成長のよろこびを実感できることを知る。それでは食べられる植物以外も、とやはり初心者にも簡単なものから物色し、キキョウ・パープルフラッシュ・観賞用トウガラシ・ゼラニウムなどでペランダを彩る。ハー

ブ類はローズマリー・スベアミント・ペパーミントをいささかたしなみ程度。

恥ずかしながら、花というのは咲いたらすぐに散るものかと思っていなかったけれど、ブルーファンは春から秋の長いあいだ咲き続けて目をよるこぼせ、やはり冬に花など咲かないと思っていたのに、厳寒のなか、アリッサムはすすくすくと育ってたくさん白い花をつけ、安らぎを与えてくれる。

さあ、こうなると小学生のころとはもうちがう、王道の朝顔にもチャレンジせねば、と種から朝顔を育てる。しかしあらためて、こんなに簡単な植物はない。いまとなつては、よくこれを枯らしたものだ、なかば呆れるほどだけれど、夏の暑い盛り、冷気の訪れる黎明のなかベランダに出て、朝顔のつぼみがひとつふたと開きはじめるのを見るのは、至福の時間であった。

この朝顔栽培、江戸時代に幾度も流行をみたことはよく知られている（平野恵『十九世紀日本の園芸文化——江戸と東京、植木屋の周辺——』思文閣出版、佐藤悟「曲亭馬琴「朝顔花合」報条」『實踐國文學』一〇一）。そんななか、かの小津久足も、じつは朝顔栽培の歴史に名を残している。それを知ったのは、意外にも東野圭吾『夢幻花』（PHP文芸文庫）という小説からである。ある方から、その作品のなかに小津家のことが出ていると教わり、おどろいて頁を繰ると、たしかに出てくる。

「さつき、例の黄色い花に該当するものは見当たらなかったといったけど、それは現存する植物にかぎらばつてことだ。前にも話したように、黄色いアサガオは存在しない。でも、か

つては珍しいものではなかった。江戸時代にはアサガオの栽培が盛んだった時期があつて、有名な資料が残っている。それらの中には黄色いアサガオも載っている」タブレット端末を見ながら、蒼太は説明を始めた。

アサガオの代表的な資料としては、『朝かほ押華』と『あさかほ叢』がある。『朝かほ押華』は一八一八年に作られた、文字通り押し花の標本だ。伊勢松坂の干鰯商人小津家の末裔によつて保存されてきた。その中の『黄丸』と記されているアサガオの押し花は、その名の通り、淡い黄色の花びらを持っている。退色していることを考慮すれば、本来の色はもっと鮮やかな黄色だったと推定できるそうだ。また『あさかほ叢』は、一八一七年に江戸で最初に刊行されたアサガオ図譜だが、その中で『極黄采』と紹介されている花は、濃い黄色を呈していたようだ。ほかにも黄色系のアサガオは、いくつかの文献等でも見られるのだ。

このいまはない黄色い朝顔、トリックの要にもなる重要な小道具なので、そこはネタバレを避けて言及しない。ともあれ、一八一八年すなわち文政元年成の『朝かほ押華』については、おそらく『伝統の朝顔Ⅲ——作り手の世界——』（国立歴史民俗博物館）にもとづいて書かれたと思われる。同書では、園芸の連と狂歌連が重なるという興味深い指摘がある一方（平野恵「朝顔合と狂歌——朝顔品評会における文人の役割——」、また平野恵前掲書第2章）、小津家旧蔵『朝かほ押華』をカラー図版で紹介・解説している。文政元年といえ、久足は十五歳であるので、かならずしも久足

の手によるとは断定できないけれども、筆跡は久足にちかく思える。いずれにせよ、当時の朝顔のサンプルが残っているのであるから、相当貴重な資料といえる。

さて、久足は晩年、本草学にも傾倒していった。伊勢相可^{おうか}には山本亡羊^{ぼうよう}（一七七八〜一八五九）の高弟、西村広休^{ひろし}（一八一六〜一八八九）がおり、その広休を中心として、伊勢には読書室門下や関係の深い本草愛好家がグループを形成して、読書室とのつながりを持っていた。久足は亡羊の門人ではないが、嘉永七年（安政元年、一八五四）から没年の安政五年（一八五八）まで計五回、読書室物産会に毎年出品しており^①、本草に関する質問の手紙もしばしば送っている（拙稿「小津久足と平安読書室——翻刻・山本榕室書簡——」『鈴屋学会報』三九、同『忘筆竊記^{ぼうへいぢき}』における小津久足の本草問答』『山口県立大学学術情報』一六）。

読書室（山本亡羊および榕室^{ようしつ}）への久足の質問は、未詳の自然物全般にわたり、植物に限定したものではないが、たとえば安政元年（一八五四）には、「溪藤 花アヤメ・花菖蒲トハ違候哉。当辺ニテ、ドンド（田人ト書）花ト申ものニよく似より候。／白黄百合 サ、ユリトハ違候哉。／瑪理花 紫陽花トハ違候哉。／杜衡 細辛トハ違候哉」などと質問している。それに対する返答は、「溪藤。ハナアヤメ。只アヤメトモ云。／白黄^{はくわう}ユリ。和名也。／瑪理花。アヂササ。紫陽花ニ充ルハ非ナリ。／杜衡。カンアフビ。俗ニ細辛ト云ハ非也。『博物志』ニモ杜衡乱細辛。古ヨリ在リ」と簡潔ながら的確なものとなっている（もつともこの返答は、榕室編の雑纂『忘筆竊記』への控えであるため、久足宛の返書には、

いますこし丁寧に記述していたかもしれない）。

さらに、安政三年の久足の質問には、次のようなものもある。

木犀。金ト銀ト有之、金之方多年識候ニ、年ニより二度花咲候事、五六年メニ有之候。是ハ始花咲、散候而、十五六日モ過ギ、又咲候事ニ御座候。右ハ御識モ有之候哉。不審之事共伺申候。

山田志毛井、病人之儀、御蔭ニ而大ニこゝろよく候。此頃時候かはり之故か、又ハ病症ニより候事か、夜中下腹いたみ候事有之、いたみ不申時ハ、むね江さしこみ之気味有之候。右御加減之御薬并ニ御方書共、此度願申候。以上

ひとつは、二度花が咲く金木犀についての質問である。いまひとつの「山田志毛井」とは、伊勢山田の志毛^{しも}井^い家に嫁いだ久足の長女とらのこと。すでにとらの病状について相談しており、さらに現状を伝えて調薬を乞うていることが知れる。

これらに対する返答は以下のとおり。

木犀。一名、桂花。白キヲ銀桂ト云。初白ク、将落ニ及テ黄色ナルヲ金桂ト云。葉ウスク光アリ。花弁大ニシテ厚シ。金桂同様、ハジメヨリ、丹色、アカ、黄ナルモノ、丹桂ト云。不断サクモノ、日桂ト云。又葉ニキレコミアリテ、ヒイラギノ如キモノ、ヒラキ木犀ト云。

令愛ノ御病状、血氣ノ刺痛ト存候。左ノ方調進ズ。

『和剂局方』

烏沈湯

治諸氣諸痛及婦人血氣攻撃心腹刺痛者、云々。

烏藥・沈香・人參・甘草・生姜、右五味。

加減、香附子・艾葉・延胡索。

金木犀への回答も詳しく、とらには烏沈湯を処方している。松坂からわざわざ京の読書室を頼るあたり、久足の山本家への信頼の深さがうかがえる。

ところで久足の祖父、三代与右衛門理香はたいへんな放蕩で知られた人物であるが、その道楽のひとつに、菊作りがあった。久足の記した家書『家の昔がたり』には、次のように記されている。

三代与右衛門道秀居士（*理香）は……大酒放蕩にて、登樓をこのみ、たわむれに竹本佐代太夫と、なへ、淨瑠璃をかり、囲碁をこのみ、拳をこのみ、又は役者・角力取などをちかづけ、或は鳥をかひ、金魚をかひ、橘を賞し〔そのうち孔雀は没後までありて、わが幼年まで居たり〕又その、ちは追々に田地をもとめて……山をつくり、池をほり、菊をつくりなどして〔菊は今の広庭に、おりまがりの花壇をかまへ、花盛には、雨おほひのやね、めかくしをなして、甚壯観なりしこと、予幼年のをりながらよくおぼえたり。見にくる人、門前に市をなしき。江戸平田宗愷といふ人の作、『玉船集』（板本二冊）といふ書に「小津新七、名孝房、伊勢松坂富人、其家妙養菊」とみえたるは、新七（*分家の二代新七）、平田信久といふ人の門人にて書をまなびしかば、道秀居士とつたへの混じたるにて、江戸人も菊のことをしれるほどのこと也。道秀居士没後、遺意をつぎて、淨謙居士（*久足父徒好）も菊をつくり、在世のごとくにして、花ざかりには、道秀居士の

像を亭にかけ、きく見となづけて酒肴を供する、としぐの例なりしかども、もとより淨謙居士は心中にこのまざることにて、道秀居士のごとく財をつひやさねば、花に増減なくたゞあり来りのまゝにて、としをへしかば、花形流行におくれて、さばかりはえなくなりしかば、一年ふと休しがもと、なりて、文政年中にいたり、つひにはそのたねもたえられど、花形古風なればをしむにたらず。……、今も名をのこせるほどの放蕩なり……

〔家の昔がたり〕『小津久足資料集』雅俗研究叢書三）理香の作る菊花壇は壯観で、「見にくる人、門前に市をなし」て、その名は遠く江戸にまで聞えたという。久足の父徒好も理香の菊作りを継いだが、さほど熱心ではなかったため、いつしか沙汰止みになったと知れる。

しかし、小津家には『菊銘記』ほか複数の菊名目録が残っており、久足も「庭前之菊三種呈上仕候。先年ハ菊を作り候へ共、當時ハ其儀ハ不仕、畢竟活花之為少々貯候事ニ御座候」（『石水博物館所蔵 小津桂窓書簡集』和泉書院、書簡131）とあるように、一時期は熱心に菊作りをおこなっていたらしく、知己・川喜田遠里への手紙にも、しばしば菊の話題が見出せる（書簡89・92・131・133・134）。伊勢松坂は、その名を冠した伊勢菊（松阪菊）でも知られる菊作りの盛んな土地。手紙中の久足の含蓄ある言葉を読むにつけ、浅学のよろこびを越え、いますこし菊作りの深奥をのぞいていたようである。

ベランダで菊を育てるのもいいな、といまは次のシーズンを見

据えている。

注

- (1) 西尾市岩瀬文庫所蔵の『読書室物産会目録 八』(三〇―一二)には、小津久足(小津与右衛門) 出品の細目が備わる。以下、抄出する。
(嘉永七年)
- 〔勢州松坂〕 小津与右衛門／古本胡曾詠史集〔有金沢文庫印者〕 建長板選摺集 銀鼠皮〔舶来〕／エトヒルカノ卵〔奥州外ヶ浜〕 千鳥イシ〔奥州玉川〕 松葉〔奥州松島雄島〕／梅花〔同上雌島〕 実心竹〔同上フクラ島〕 陰杪〔泉州ウモレギ〕／八重桜ノ枯木〔伊州花垣莊名木〕 樵米石〔和州信貴山奥米尾谷〕 竹米〔野州日光山天保五年所生〕／神足石〔勢州度会郡大黒谷〕 ヤケ石〔信州浅間岳〕 荻箸〔信州荻窪村〕
(安政二年)
- 〔勢州松阪〕 小津与右衛門／石芝一種大者〔勢州度会郡槌柄浦海底所得〕
(安政三年)
- 〔勢州松阪〕 小津与右衛門／宋紫石獅子写真図〔依蜜書所載者〕 古板楞嚴経〔有高師直書後者〕／古本蒙求〔本邦活字板之濫觴云〕
(安政四年)
- 〔勢州松坂〕 小津与右衛門／朝鮮板政和本草 嘉慶元年増補全書 薔草根〔石州人丸社〕
(安政五年)
- 〔勢州松坂〕 小津与右衛門／蛇木〔紅毛舶来〕 コロビ水精〕